

京都教育大学 F D ニュース

No. 61

2012 年 2 月 8 日

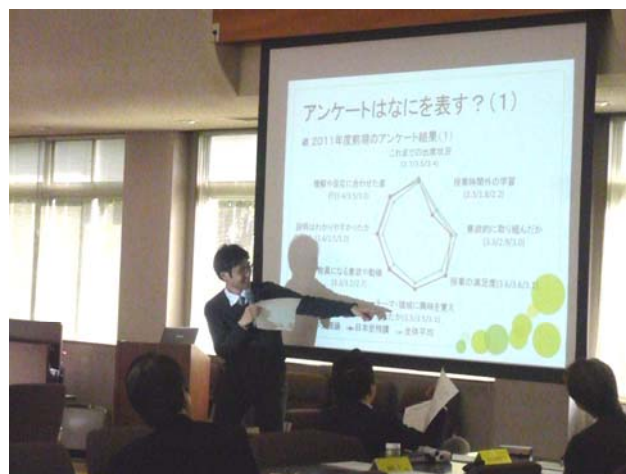
F D 委員会

平成 23 年度第 2 回 FD 研修会について

今年度第 2 回目の FD 研修会が 1 月 18 日に開催されました。講師は、本学社会科学科の吉江崇先生です。「教科専門授業の格闘と葛藤——授業評価アンケートの自己分析から——」というテーマでご発表いただきました。

吉江先生は、学部でいわゆる教科専門の講義「日本史概論」「日本史特講」などを担当されています。教員養成大学における教科専門の講義はどうあるべきかについて、担当講義でのご自身の取り組みをもとにお話をいただきました。

吉江先生によれば、2011 年度前期のアンケート結果では、それぞれ内容の異なる講義を行っているにもかかわらず、「日本史概論」「日本史特講」ともに、同じような結果（数値）が出てきたそうです。まさにそこに「問題」があるのではないかと指摘がなされました。すなわち、異なる目的をもっているはずの複数の講義間において、同じような結果が出てくるということは、ともすると、学生たちによる授業評価が講義の一側面（たとえば、わかりやすく楽しかったなど）のみをとらえている傾向にあるのではないかと。とりわけ、専門的な研究に照らし合わせてみると、教員養成大学における教科専門の講義は、そうしたいわば講義の一側面に配慮するだけでよいのだろうかとの指摘がなされました。



このような問題意識のもと、吉江先生は、具体的に「日本史概論」「日本史特講」の現在の講義内容を紹介されました。そして、現在の講義内容に至るまでには、学生たちの反応を見ながら、年度ごとに内容に変化を加えてきたこともご紹介いただきました。学生たちからの要望としては、たとえば「教科書が教えてくれないような小ネタを教えてください、

「パワーポイントやビデオを使って授業をしてほしい」、「史料を読むことは嫌い」などがあるとのこと。

こうした学生たちの要望に耳を傾ける一方で、やはり教員（研究者）が伝えたいと考える日本史の研究の魅力（たとえば「史料のおもしろさ」など）があり、この両者の間に「葛藤」が存在するということが指摘されました。学生の要望のみならず「研究そのものを知る機会」をつくることも必要だと考えられるため、教科専門の講義のあり方をめぐって「格闘」のあることが指摘されました。

学生たちの反応とつねに照らし合わせながら研究の魅力を伝えようと、日々試行錯誤していらっしゃる吉江先生の講義の魅力が反映されたご発表でした。

研修会後に先生方からいただいたアンケートにおいては、次のような感想などがありました。

- 「学生へ教えるべき・考えさせる内容と学生からのニーズとの齟齬を把握されながら、教科専門の授業のあり方を常に考えておられる、その辺りが学生からの評価の高さにつながっていると思います」。
- 「板書を計画的に行うことが大切なことを知りました。たしかに口頭だけで行う大学の授業と高校までの学習の形式との違いが大きいのだと思いました」。
- 「受講生の知識やレベルに大きなばらつきがあるというのは確かにその通りで授業内容の設定には苦労しています」。
- 「児童・生徒を教育する教師の卵にとって、一面では研究者であることの重要性は常に感じています。同感です」。
- 「毎年授業内容を変えられるなど、本当に大変なご苦労をされ、真摯に取り組んでおられるのだなと感服させられました。私は、基本ラインは変えず、項目やプレゼンの方法を変えるなどの方法をとってきましたので、このように根本的に何を教えるかというところから考えなおすということを初めて考えさせられました」。

教科専門の講義のあり方、ひいては大学における研究と講義の関係について考えていく上で、大変示唆に富む研修会となりました。吉江先生、ありがとうございました。

なお、今後のFD研修会のあり方に関する課題についてのご意見もいただきました。まず、より多くの先生方にご参加いただけるとよいのではないかとのご指摘がありました。次に、吉江先生のお話にもあったように、大学における「よい授業・よい講義」とはどのようなものなのか、とりわけ、学生の満足度が高い講義がよいのかどうかについて考えていく必要があるのではないかと、というご意見などもいただきました。こうした課題について、今後も引き続きFD委員会で検討していきたいと考えています。

問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：安東（委員長）、杉井（副委員長）、巻本、山口（博）、樋口
事務担当：高松、大谷